

# 報凶問歌

——大伴旅人のいとなみ——

同 前 美 希

## 一 はじめに

大宰帥大伴卿報凶問歌一首

禍故重疊 凶問累集 永懷崩心之悲 獨流斷腸之泣

但依兩君大助傾命纒繼耳 筆不盡言  
古今所歎

余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊与余麻

須万須 加奈之可利家理

神龜五年六月二十三日

『万葉集』卷五は周知の如く、大宰府を中心に制作された和歌、そして漢文・漢詩を時系列に収めた巻である。その巻頭に位置するのが右の大宰帥大伴旅人作の報凶問歌である。

報凶問歌は諸説あるものの大伴旅人が妻を亡くして「禍故重疊 凶問累集」<sup>①</sup>する中で都への「報凶問」を契機とし、

その大きな枠組みの中でしたためたものである。もとは書簡文であったと考えられる漢文と和歌という異なる表現スタイルを組み合わせ、更に注記的小書きである「筆不盡言古今所歎」をあわせて一作品として完結させている構成が特徴的である。完全に個人によって漢文と和歌を結びつけ一作品としたのは集中では報凶問歌が初例であり、巻五の作品が時系列に並べられていることに注目するとその在り方は後続して収められる巻五の作品へと継承されていることが了解されるのである。それゆえ、報凶問歌はその制作の契機が如何なるものであったとしても、いわゆる筑紫歌壇の幕開けとして巻五の巻頭を飾っていると捉えられるのである。

しかし、報凶問歌において旅人のどのようないとなみが表出されているのかという問題については、従来あまり指

摘されていなかったようである。本稿では、報凶問歌を当該作品として、当該作品に大伴旅人のどのようなものがなされているのかという問題について明らかにすることを目的とする。その第一としてまず、漢文十和歌という構成の中でも、特に特徴的な注記の小書き「筆不盡言 古今所歎」について考察をすすめる。

便宜上、漢文の部分は和歌の前にある文という意味で前文、和歌は当該歌とする。

## 二 「筆不盡言 古今所歎」について

前文と当該歌という組み合わせの中で「筆不盡言 古今所歎」が諸本によって、現在でいう注記の形をとって記されている点と、従来指摘されているような書簡の結びの常套句として前文末に記されていることで、和歌の前に位置しているという点に注目される。

この「筆不盡言 古今所歎」については、はやく『萬葉代匠記（精撰本）』が『周易』の「書不盡言、言不盡意」を指摘する。「書くことは言うことほど表しつくさず、言うことは心で思うことを表し尽くせない」という内容で、心の内である「意」を表すのに、近い媒体として、「言」そして「書」の順であげられており、どちらも「意」を尽くせはしないという内容である。この『周易』の用例は小

島憲之氏<sup>3)</sup>によって、後に書簡の結びに多用されることが指摘されている。そして、当該作品の「筆不盡言 古今所歎」については、書簡の結びとしての常套語であり不要の句として、編集者の可能性を指摘されながらも「旅人のそれとみる方がよからう。」と、書簡の結びとしての常套句が応用されたと主張される。また、書簡を結ぶ常套句という指摘の一方で、旅人の趣向や情をよみとる説も見受けられる。井村哲夫氏は『全注』で「書簡の結びをちよつとひねって情を添えた。旅人の気分的情緒的な性格がこんなところにもあらわれているであろう。」とされ、村山出氏は以下のように指摘される。

自分の心情の複雑さや深さを率直に出せぬもどかしさを意味するが、旅人は立場上一途に妻だけを悼み偲ぶこともできないという嘆きであろう。

つまり「筆不盡言 古今所歎」とは、自己の心情を尽くしえないことに対する悲しみや苦しみ、もどかしさといった心情の吐露と捉えられ、古橋信孝氏も和歌史の中で漢文と和歌の関係を注目され同趣旨の指摘をされている。列挙した指摘に従い、「筆不盡言 古今所歎」は、前文では心情を表現しきれないもどかしさの吐露ともとらえられる。しかし、旅人は「筆不盡言」を「古今所歎」と結びつけて用いており、古今を視野に入れて文をなしているということ

が注目される。この古今は、『私注』では、「古は易の文を指し、更に一般に古からの意で、昔も今も歎かれるの意」と指摘される。このことから、旅人に先行する「書簡十異なる表現スタイル」という例を調査した。周知のように、我が国の上代にはほとんど残されていないため、漢籍に求めた。その結果、現在どちらかのスタイルが散逸してしまつた例が多くあつたが、「書十異なる表現スタイル」という構成と「筆不盡言」との結びつきから以下の例に注目する。

易に曰はく、書は言を盡くさず、言は意を盡くさずと。然らば則ち書は言を盡くすの器に非ず、言は意を盡くすの具に非ず。況や言も意を盡くすに至るを得ざる有り、書も言を盡くすに至るを得ざるをや。猥慥に勝へず、謹んで詩一篇を貢す……

〔贈劉琨一首并書四言〕盧子諒『文選』卷二十五贈答三

右は、『文選』の中で、「書十異なる表現スタイル」という構成が完全な形で残っている唯一の例であり、蔵中進氏によつて、他の駱賓王の作品を出典としながらも「あるいはここからと考えるべきか」と指摘されている用例である。「書十詩二十篇」というスタイルを持ちながら、『文選』の「贈答」の部に収められていることにも注意したい。こ

の用例の全体の制作意図としては、盧子諒が自分の立場を弁明するためにしたためたものであり、当該作品とは、内容上の距離がある。しかし、傍線部分のように盧子諒が詩を贈る動機として、『周易』の「書不盡言、言不盡意」に独自の見解を加え、自己の拙い詩を謹貢する理由として用いており、『周易』の句に盧子諒の「言」「書」「意」に対する考えを付与し展開していることで「詩」への態度を表出しているのである。そして、「書不盡言、言不盡意」は書という文体にあつて書簡文の結び以上の役割を担っているという点が注目される。また、『世説新語』の文学四には、清談の一テーマとして「言盡意」の記事が残されており、『周易』の「書不盡言、言不盡言」には様々に独自の見解や解釈を結びつけられたことが窺えるのである。以上から、「筆不盡言」には、単なる引用としてのみではなく、独自の見解を付与する許容を持つ語としての来歴を推察できるのである。そして、旅人の「古今所歎」は、そういった来歴の中で、様々に解釈し、特に中国の人々には限らず、表現の上で尽言、尽意を試みてきた人々を指していると考えられるのである。

「筆不盡言」について「古今所歎」とあわせて漢籍との関わりを述べた。旅人はどのような心なみの中で、この「筆不盡言 古今所歎」を前文と当該歌の間に位置させた

のか「筆」と「言」が示すところを明らかにしつつ述べた  
い。

そのために、当該作品を構成する当該歌と前文それぞれの  
表現について考察する。

### 三 当該歌について

当該歌の表現について「かなしかりけり」より上の句が  
すべて「かなし」の内実を説明していることから、この歌  
の主眼は「かなし」にあるといつてよい。その「かなし」  
は「けり」と結びつけられており、この点については『釋  
注』に以下の指摘がある。

また、結句、も沈痛な悲しみをこめて「悲しかりけ  
り」と述懐するのは、集中これ以外にはない。「悲し  
き」「悲しも」などと結ぶのが万葉の慣例であった。

当該歌のように、「形容詞＋けり」という表現は集中特殊  
であり旅人の亡妻関係歌と讃酒歌にみられる。当該歌より  
後の例ではあるが、同じ旅人の作として注目しておく。

まず、亡妻関係歌の例としては、「還入故郷家即作歌三  
首」の内一首があげられる。

A人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

(3451)

A歌の「苦しかりけり」については、その出立に際して

「右二臨近向京之時作歌」の左注を持つ「都なる荒れたる  
家にひとり寝ば旅にまさりて苦しかるべし」(3440)  
にて、旅よりも都の家での独り寝が苦しいであろうと「べ  
し」を用いて予見がなされている。その後、旅を終えて実  
際に独り寝を経ての実感として「苦し」に「けり」が結び  
つけられ「苦しかりけり」と表出されているのである。次  
に、「大宰帥大伴卿讃酒歌十三首」での「けり」は、讃酒  
歌十二首を経た十三首目にて「酔ひ泣きするにほ及かず  
けり」(3350)と詠まれていた。この十三首目に至る  
までの十二首の中で酒を讃美する内容を「らし」(巻3三  
三八、三四〇、三四一、三四二、三四七)を用いて様々に  
推定しているのである。このことから讃酒歌の中では「ら  
し」から「けり」へ表現を変化させて讃酒する内容を結論  
づけていると考えられる。以上の二つの例から、「けり」  
は予見したことを実感した時、また作歌時の思考の到達点  
としての述懐を表現する際に旅人に用いられたと確認でき  
るのである。そして、後の例からではあるが「形容詞＋け  
り」が体験や思考を通しての実感であることから、「かな  
しかりけり」は旅人の実体験と旅人なりの思考を通しての  
表現であると捉えられるのである。

当該歌の「かなし」の内実については、前掲の村山出氏  
や青木生子氏<sup>(8)</sup>によって指摘されているように、別の折々に

歌い出されてゆく旅人の亡妻関係歌によつて具体化されてお<sup>9</sup>り、当該作品に続く山上憶良の無題の漢文と漢詩、日本挽歌によつて旅人の亡妻がモチーフとされていることから、当該歌の「かなし」には、妻の死や不在に対する心情が含まれていることは揺るぎない。以上の点から、旅人が亡妻を意識して「かなし」と詠んだ「天平二年庚午冬十二月大宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首」の題詞をもつ次の一首に注目する。

B 行くさには二人我が見しこの崎をひとり過ぐれば心かなしも 一云 見もさかず来ぬ

右二首過敏馬崎日作歌

(3四五〇)

B歌は題詞に示されているように、五首一連の歌群に属しておりその結びである。B歌の「かなし」に注目すると、上の句は往路では妻と二人で見た崎を復路では一人でみなくてはならないという内容であり「心かなしも」と歌の内部で明確に「かなし」の理由と状態が示されているのである。加えて、左注にみえる「敏馬」は「見ぬ女」を暗示し、西宮一民氏担当『全注』に「敏馬の崎」は「見ぬ妻」(亡妻の)連想を起こさせるとあるように、歌の内容と左注によつて「心かなしも」にみられる心の状態が明確に示されており、その状態と理由が特定できるのである。ここで、当該歌に立ちもどり「かなしかりけり」についても、当該

歌全体の中での解釈をすすめたい。当該歌の主眼である「かなし」の内実を表す上の句のありようを考察する。

上の句には従来多く「世の中はむなしきもの」と仏典語、仏教思想との関係に指摘が集中していた。「世間空」<sup>10</sup>「世間虚仮」との関わりについて、芳賀紀雄氏には、以下の指摘がある。

旅人の「むなし」を初めとし、挙例(巻三四四二、四五一。大般涅槃経巻一、寿命品一之一。方广大莊嚴経巻六、出家品。一同前注)のものはいずれも、自己の大切な人の喪失に際して、誰しも感ずるうつろさ、はっきりと穴のあいてしまったごとき、如何ともしがたいうつろさに端を発する用語と解される。

仏教の「空」概念を基盤とすることを否定し、「あくまでも妻の死などによる不在感・空虚感を前提」とする指摘である。また、波戸岡旭氏にも以下の指摘がある。

彼は思想や宗教の真義を究めながらも、敢えてそれら仏教やまた神仙思想などにすがって自己を救済しようとはしないのである。思想や宗教の核心に触れながらも、それを否定し拒絶することによつて、胸中の悲憤をつのらせ、そしてその悲哀の究みを詠み上げ、憂愁に沈潜する果てに、詩的カタルシスを得ているのである。

これらの指摘から、旅人は仏教の教理を正確によみこむことを目的としていないことが確認される。しかし、「よのなかはむなしきもの」という表現は、全く仏教思想を排除した表現ではなく仏典語という知識を基盤として作歌された表現である。「世間虚仮」「世間空」といった仏典語は「かなし」を表現するために、旅人が自己の心情にひきよせて詠み込んでいるのである。また、旅人が仏典語をそのまま仏教教理に即して詠み込んでいないことから、当該歌で表現された「よのなかはむなしきもの」には、旅人独自の見解が付与されていると考えられる。このことは、仏教思想から当該歌の直接の分析を否定するものであり、B歌にみたような明確さを欠く表現である。ここで、「かなし」の内実について前文の表現から考察をすすめる。

「よのなかはむなしきもの」とし「とき」の「とき」は、前文の「禍故重疊 凶問累集」した時であると推察でき、「かなし」の内容は、自分の妻の死に加えて都での親しい人の死に対する心情が含まれると考えられる。しかし、前文にみる「かなし」の要素はそれだけには留まらず、「独」について前掲の芳賀紀雄氏に「京師の「兩君」に応ずる、大宰府の旅人の「独」を示す用法だといえよう。」の指摘があるように、妻を亡った上に都の兩君とも遠く離れた大宰府で「悲」を懐き、「泣」を流す孤独な姿が描かれてお

り、その心情としての要素も推定される。前文の表現からは以上のように「かなし」の内実が推測されるのである。しかし、一首のうちで「かなし」の上にあることよってその内容を限定する「よのなかはむなしきもの」とし「とき」は仏典語「世間空」「世間虚仮」をそのまま詠んだのではなく自己の心情に引き寄せて詠まれており、そのため「かなし」の内実は明確ではない。

このように当該歌の「かなしかりけり」の内実は、妻を亡い、更に前文から「禍故重疊 凶問累集」という実体験をふまえての述懐であり、「世間空」「世間虚仮」という仏教思想を自己の体験を経て、自己の見解を結びつけて「よのなかはむなしきもの」とした旅人の思考過程を通じての述懐であると捉えられる。しかし、その「かなし」の表現のされ方は具体性を欠き、その内実は一義的には捉えられないのである。

そのように旅人が懐いていた心情については、井村哲夫氏担当の『全注』における以下の指摘に注目される。

旅人は、「世間は空し」と今さらながら観念したあげく、いよいよとりとめようもなく拡がってゆく悲しみを、目で追っているように見える。

従うべき見解であり、旅人が自己の経験や思考を通じて「よのなか」を「むなし」と認識して「かなし」に結びつ

けることは、その対象や内実の具体性を欠くものの、同時に旅人の懐いていた多様かつ複雑な心情を表現し得ているのである。

このように、当該歌「かなし」は多様な心情を含んでいるのであり、一つの対象や一つの仏教思想からの知識に限定されず、その複雑な心情は「かなし」という和歌表現によって表出されているのである。

ここで、そのような複雑な心情を表現している「かなし」という語に注目しておく。和歌表現であり、やまとことばでもある「かなし」という語は、集中に二十五例ほどみられる。うち四例をあげる。

高市古人感傷近江旧堵作歌 或書云高市連黒人

C<sub>1</sub>古の人に我れあれや楽浪の古き京を見ればかなしき

(1三二)

C<sub>2</sub>楽浪の国つ御神のうらさびて荒れたる京見ればかな

(1三三)

D出でて行きし日を数へつつ今日今日と我を待たすら

む父母らはも 一云母がかなしき (序省略5八九〇)

大蔵少輔丹比屋主真人歌一首

E難波辺に人の行ければ後れ居て春菜摘む児を見るが

かなしき

(6一四四二)

Cでは旧都の華々しさが喪失されたことに対する心の動き

としての「かなし」、Dでは哀れき、Eではかわいらしきやいじらしきという愛着を表す表現として表出されている。このように、やまとことばとしての「かなし」は喪失したもののへの心情や哀れき、そして愛着というように多様な意味を含んでいることが了解される。旅人は自己の内にある多様な心情を表現することばとして、このように一語に多様な意味を含む和歌表現でありやまとことばである「かなし」をえらびとつたと推察する。

以上、旅人の複雑で多様な心情を表すやまとことば「かなし」は上の句での「よのなかはむなしきもの」とするとき「かなし」は経験とともに思考を経ての述懐である「形容詞十けり」の形として「かなしかりけり」と表現されるものの、その内実は一義に限定されるものではなく旅人の懐いていた多様かつ複雑な心情を表出しているのである。

#### 四 前文の表現について

次に、前文の表現について考察する。前文の大きな特徴として四六句を中心とした美麗な対句を用いた文体と、「但依兩君大助傾命纔」という都へいる兩君への謝辞ともとれる配慮が示されている点があげられる。この「傾命」は、諸注釈書で概ね「傾きかける命」とされているように、

命を落としかけるような危うさを示している。つまり、旅人は度重なる不幸の中、その傾命をつぐ両君の大助をあげ都からの書簡の差出人に対して、御礼を述べているのである。

ここで、当該歌で中心に考察した「かなし」と関わる表現として「崩心之悲」を考察する。「永懷崩心之悲」は「獨流断腸之泣」と対で用いられることによって、その悲しみを表現しているのであるが、「永懷崩心之悲」という表現について「悲」が「崩心」という語と組み合わせられていることに注目される。「悲」は、「崩心」と組み合わせられることによってその内容が限定され、具体化されていると考えるからである。「崩心」については、前掲の蔵中氏が以下の用例を示される。

故に寢食に夢想し噫指の恋は徒らに深し。歳時に蒸嘗し、崩心之痛は極り罔し。

（略賢王「上吏部裴侍郎書」）

誠敬克く展ぶれば、幽顯咸秩あらん。惟ひ懷ふこと永遠にして感慕して崩心せん。

（『宋書』礼志）

右の用例に加え、前掲の芳賀氏にも以下の指摘がある。

撫育の恩を追ひ維ひ毎に慈顔の遠きを念ふ。泣血して崩心するも永に逮及する無し。

（唐太宗「宏福寺施齋願文」）

また独自にこれらを追跡調査した結果の一部をあげる。

ア百僚は機を危ぶみ首領は地を全うする有る無し。萬姓は崩心し、妻子は復た相保たず。

（『宋書』卷八本紀八 明帝）

イ開元中を以て私第に薨ず。之を聞きて遐迹は、崩心之感を懐かざることなし。

（徐堅「唐故右驍衛大將軍上柱國金河郡開國公裴公墓墓誌銘」『全唐文』卷二七二）

アのように国が乱れ、王朝が滅亡することに対して、「崩心」を用いる例も少数みられたが、イのように人が亡くなった時の心の動きとして用いられる例が「神道碑」や「哀策文」などに圧倒的に多くみられた。これらの用例から、「崩心」とは、人が亡くなったことに関しての心の動きであることが確認できる。

さらに、「崩心」によって具体化される「悲」との結びつきに注目すると、「崩心」と「悲」を「之」で結びつけた表現は見いだしにくい。蔵中氏のあげられた一例目と、イの用例が近いものの、「崩心」と「悲」を結びつけた語はあまり一般的ではなかったと考える。

つまり、旅人は漢籍で用いられる「崩心」を、「悲」と結びつけることで意識的に「人の死を哀悼する」という意味を忠実に取り入れて「悲」の内容を、前文の中で具体化



し限定しているのである。

## 五 表記について

以上、前文と当該歌それぞれの表現について「かなし」と「悲」を中心に考察してきた。その結果、「かなし」は対象や状況といった具体性を欠くものの、旅人の内にある複雑な心情を一義に限定することなく表出していると捉えた。一方の前文は四六句の美麗な対を中心として「悲」に「崩心」を結びつけて人の死を哀悼する意を明確に示している」と述べた。前文と当該歌それぞれの表現について考察してきたが、ここでそれぞれの表現スタイルを持つ表記の問題について考察したい。当該作品については、前文が四句六句の対を中心とした美麗な漢文体によって記されているのに対して、当該歌は完全なる一字一音表記によって記されている点が特徴的である。

大伴旅人を中心とする用字については、詳細に述べた古屋彰氏の論がある。氏は、「大伴旅人の歌には一字一音の正訓字のみがわずかに見られ山上憶良の歌にはいくらかの正訓字が混入している」と個々人の表記意識に微妙なゆれを見いだし、「巻五本体部の歌が作者による原筆録の姿を色濃く残しているとの見方がなされる」と指摘される。本稿では、古屋氏の指摘に従い、当該作品は大伴旅人が清書

あるいは筆録した段階の形を色濃く残しているとの立場に立つ。旅人の完全なる一字一音という表記のされ方は、先学によって漢文部との対照対立を意識しての表記であると指摘されてきた。その対立、対象について考察したい。

まず、当該歌の上の句について次の内田賢徳氏の指摘に注目する。

ムナシとは（略）確かなものないありさまである。

「世間空」を踏まえたにしても、ムナシという倭語に置き換えれば、直ちに倭語としての意味に於いて表象される。「世間」とヨノナカの場合との差がそこにあり。ヨノナカという倭語は「世間」という仏典語を抜きにしては成立しなかった語である。いわゆる翻訳語であるが、しかし、だからといって、ヨノナカが全き仏典語だというわけではない。

内田氏の指摘に従い「世間」を「ヨノナカ」に置き換えた場合、「ヨノナカ」という語の意味に於いて表象されたと考える。そして、更に「余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子」と詠み込まれ当該作品の中に位置することで、当該歌の意味の中で内実が位置づけられると考えられるのである。

上二句については、旅人が「よのなか」を「むなしきもの」と認知して和歌に詠み込んだ時点で、仏典語と当該歌

の表現の間には、旅人の独自の見解が付与されていると述べた。表記の面に於いても、旅人が完全なる一字一音表記によって「余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子」との認識に「世間虚仮」「世間空」という語を用いずに表記したことで漢籍や仏典からの知識によって、その内実が特定されることがないと考えるのである。つまり、完全なる一字一音表記をとることで、「世間虚仮」「世間空」を当該歌の主眼「かなし」にひきつけた「よのなかはむなしきもの」という和歌表現を創出し得たと考えるのである。

次に、当該歌の主眼である「かなし」に注目する。旅人の用いたやまとことばである「かなし」は先述したように複雑な心情の表出であり、前文の「悲」のように限定されたものではない。その「かなし」が完全なる一字一音表記によって「加奈之」と表記されることによって、前文にある「悲」に限定されることのない旅人の心情を表現し得ているのである。すなわち、当該歌の「かなし」が完全なる一字一音表記のやまとことばにて表現されていることによって、前文の「悲」や他のいかなる正訓字によってもその内実を制限されることなく、旅人の懐いていた心情の表現を可能にしているのである。

旅人は、自己の心情が前文にみられるような「悲」では表現し尽くせないものであることを認識していたのである。

そしてその心情を表出するスタイルとして和歌をえらびとり、やまとことばにて表出した自己の心情を表記するスタイルとして完全なる一字一音表記を選択したのである。

前文を美麗な文として表記したことに對し、自己の心情を表出する和歌は完全なる一字一音表記によって記すことによつて、当該作品は成り立っているのである。

## 六 報凶問歌

以上、表記の面から前文と当該歌は異なる方針のもと、それぞれの表記方法によつて記されていると述べた。

ここで、前文と当該歌を結びつけた旅人のいとなみについて「筆不盡言 古今所歎」の面から考察したい。この注記の小書きの示す「筆」と「言」について、「筆」は前文の直後にあることから、前文を指すと捉える。一方の「言」は、『周易』や前掲した盧子諒の作品の「言は意を盡くすの具に非ず」の部分などから「口で言う言葉、話す言葉」という意味に理解する。つまり、注目する「筆不盡言 古今所歎」は「筆では話すように尽くせません」と解釈され、先学が示されるように心情が吐露できぬもどかしさと捉えられる。

しかし、ここで注目すべきは当該作品は「筆不盡言 古今所歎」でとじられるのではなく、そのうしろに和歌が結

びつけられて完結していることと、尽くせないとされるのは『周易』に代表されるように「意」、つまり心のうちであるという二点なのである。

当該作品は前文も当該歌も記されているのであるが、周知のように歌は元来歌われるものであり、「筆不盡言 古今所歎」において当該歌は「言」に近いものである。しかし、「言」は「言」であり「歌」ではない。当該歌には、旅人の懐いていた多様かつ複雑な心情がやまことばによって詠出されていると述べてきた。つまり、旅人は「筆」によっても「言」によっても尽くせない自己の心情を和歌に託しているのである。

当該作品は、大きくは「報凶問」という枠組みがあり、「報凶問」をめぐる「意」を尽くすには、前文と当該歌のどちらが必要不可欠であった。旅人は、都からの凶問に触れて、自己の悲しむ姿や哀悼の意、そして両君への謝意を前文にしたためたのである。しかし、自己の中に湧き上がる衝動を自覚し、前文のみには留まらずとりとめもなく拡がる心情を和歌に託したのである。その衝動とは、心情を心外に吐露し他人に伝えたいという旅人の思いであり、歌人としての所作であろう。「報凶問」をめぐる「意」の中で、自己の懐く複雑かつ多様な心情は和歌に託し、その和歌と前文を結びつけて、一作品を構成することで「報凶

問」という「意」を尽くすという意志を「筆不盡言 古今所歎」にて表明したのである。

これまで、書簡の常套句であり意味をなさないとされたり、自己の心情を表出し得ない悲哀の吐露とされてきた「筆不盡言 古今所歎」は単なる常套句や悲哀の吐露などではない。「筆不盡言 古今所歎」や、書簡の結びなどの根底にある『周易』の「書不盡言、言不盡意」が独自の解釈や見解を付与し展開される来歴を持つことは先に述べた通りである。また、『周易』の句は『文選』に収められる盧子諒の作品にも引用され、当時の我が国の官人層には知識として享受されていたと推定される。そのような背景の中で、旅人が「筆不盡言 古今所歎」と記し当該作品の前文と和歌の間に位置させたここにこそ、旅人の作品制作に對しての意思表明があると考えるのである。

そして、「筆不盡言 古今所歎」を旅人の意思表明と捉えた時、以上に考察してきた当該作品のいとなみは旅人の自覚のないとなみとなり、旅人は当該作品を成したと考えるのである。

## 七 おわりに

以上、当該作品における大伴旅人のいとなみについて考察してきた。旅人は「報凶問」というテーマの中で、漢文

と和歌を結びつけ、特に和歌によって自己の心情を表出したのである。また、漢文と和歌の機能への意識はその表記方法にも表れており、漢文と和歌をあわせることによって一作品として完結させ「意」を尽くすことを試みたのである。そして、その意思表明として「筆不盡言 古今所歎」を付け加えたと考察するに至った。

旅人は、都からの凶問に触発されて当該作品を成したのであるが、このようないとなみを持つ当該作品は、単に都の両君との関係の中で完結するのではなく、知識官人層への公開を目論んでいとなまれたと推定される。そして、旅人が試みた異なる表現スタイルを結びつけ一作品を成すという態度は、後に大宰府で作品を制作する官人に受け継がれてゆくのである。当該作品がどのように受け継がれ個々の歌人によって展開されたのかについては別稿にて考察をすすめる。

## 注

- (1) 井上通泰氏（『雑 凶問』『万葉集雜攷』明治書院、昭和13）『井上通泰関係著作集』9、岩波書店、昭13、所収の「凶事の知らせ」という指摘に従う。
- (2) ここで、巻五の注記について確認しておく。巻五前半、旅人が帰京するまでの注記の例をあげる。①大伴淡等謹

状（対馬結石山孫枝）②後人追和之詩三首の作者明記（帥老）③大伴淡等謹状（八一—以下の、謹状不具）④梅花宴の作者明記（八一—五〇八四六、作者明記）④は、作者名など書き入れが後の時代でも可能な場合である。しかし、特に旅人の作品に用いられる注記の形をみると、作品の内容と結びつき、①②のように作歌当時の旅人しか知り得ない内容を表している。また、③の「謹上不具」も、都へ贈った作品の結びとして、制作の段階から付けられていたと考える。これらのことから、当該作品の注記の小書きも旅人の手によると考える。

- (3) 小島憲之氏（『大伴淡等謹状』『萬集』74号、昭45初出。『國風暗黒時代の文學中（上）—弘仁期の文學を中心として—』塙書房、昭48）

- (4) 村山出氏（『報凶問歌と日本挽歌』林田正男編『筑紫万葉歌の世界』雄山閣、平6）

- (5) 古橋信孝氏（『万葉集』の表現史）『和文学の成立 奈良平安初期文学史論』若草書房、平10）

- (6) 藏中進氏（『万葉集と散文』久松潜一監修、『萬葉集講座 第三卷 言語と表現』有精堂、昭48）

- (7) 〔三〕歐陽石言盡意論畧曰、夫理得於心、非言不暢。物定於彼、非名不辨。名逐物而遷言因理而變、不得相與為二矣。苟無其二、言無不盡矣。

また、書簡の結びである常套句としての「筆不盡言」に関わる指摘として、（孫徳謙『六朝麗指』、翻訳として、『中国文章論 六朝麗指』古田敬一氏・福井佳夫氏、汲

古書院、平2)に、「六朝文士、引前人成語、必易一二字、不欲有同鈔襲。……陳後王與詹事江總書、言不寫意。此用易書不盡言、言不盡意。今盡則易爲寫字矣。……」とあり、また、「臣聞、書不盡言、言不盡意、然則意非言宣、言非筆不盡」『梁書』卷五十六 列傳第五十 侯景)の用例もみられるが、本稿では、旅人が「筆不盡言 古今所歎」と用いたことに注目して考察する。

- (8) 青木生子氏(亡妻挽歌の系譜―その創作的虚構性)『言語と文芸』74号、昭46初出。『萬葉挽歌論』塙書房、昭59。『青木生子著作集 第四卷 萬葉挽歌論』おうふう、平10所収)

- (9) 特に、卷3四四〇「苦しかるべし」、四四九「涙ぐましも」、四五〇「心かなしも」、四五二「苦しかりけり」、四五三「心むせつつ涙し流る」によって「かなし」は具體化される。

- (10) 芳賀紀雄氏(終焉の志―旅人の望郷歌)『女子大國文』78・昭50初出。『萬葉集における中國文學の受容』塙書房、平15)

- (11) 波戸岡旭氏(遊於松浦河)と『懷風藻』吉野詩―大伴旅人の文人的氣質―『上代文學』66・平3)

- (12) 古屋彰氏(「万葉集仮名表記歌の表記意識をめぐって」(上)『国語と国文学』昭42。「巻五の表記」『万葉集の表記と文字』和泉書院、平10所収)

- (13) 内田賢徳氏(旅人の思想と憶良の思想)『セミナー万葉の歌人と作品』卷四、和泉書院、平12)

本文に引用した『文選』の訓詁は、全釈漢文大系28『文選』に拠った。その他の漢文はすべて訓詁文に改める際、中央大学文学部福井佳夫先生のご指導を賜った。ここに感謝申し上げる。(尚、訓詁文に付した○印は論の都合上原文のまま引用した箇所である。)

〔付記〕本稿は、平成十五年十月十九日に専修大学で開催された上代文学会秋季大会研究発表会での口頭発表を基にしている。席上、貴重なご意見を賜った諸先生方に、深く感謝申し上げます。